



「ふい～いやぁ最近風呂入れてなかったから良子と会えて良かったわ～」
「いやぁこっちこそだよ。食料もなくなってペンペン草喰う羽目になってたしね。そろそろ運だめしキノコも視野に入ってたしね～」
草原を旅していた勇太達であったが空腹で行き倒れになっていた良子を見つけた。話を聞けばもう2、3日何も食べていない状態であった。食料を分けると言ったところ何も返さないと女が廃ると一緒に行動していたシードラモンの風呂を使わせてもらう事で交換という形になった。勇太達も草原地帯に入ってから水源が見つからずそろそろ臭ってくる頃合いとなっており願ったり叶ったりであった。
「それにしても二人旅しかも小っちゃい2人とはねえお姉さん泣いちゃうよ～」
「お姉さんって良子とふたつしか変わらないでしょ」
「それにしてももしかしてお二人ってアレなの恋人って奴なの？」
良子にはやけた顔で光を見た。
「なにそれ～もうやめてよ。あいつは弟みたいなもんよ!もしくは子分とか舎弟ってやつよ!」
「デビドラモンは勇太好き!」
「ほんと～?勇太君苦労してんな～」
「楽しそうだね勇太～」
「ははは…そうだね…うん」
「勇太お前顔真っ赤だなー」
「う…うるさいなアグモン」
「おい勇太ご飯まだかよ～」
「まだ作り始めだよツカイモン…」



「へえ～勇太君包丁の扱い慣れてるね。」

「そ…そうですか？ここ来てから結構やってそれに楽しいんですし。」

「はぁ料理男子ってやつかぁ…いいなぁ～お姉さんに毎日味噌汁作ってくれよ～」

「もうやめてください！あっそういえばコレ良子さん使ってます？結構下さいますれば美味しいですよ？」

「良子の料理は足の太さに比例するみたいに大雑把だからな～勇太変わってくれよ」

「怒るよ」

「ごめん」

キャッキヤとはしゃぐ勇太と良子を見て光は本人もなんでか分からず面白くないのかむすっとしていた。

それに気付いたのか良子は光の方に振り向きにやぁっと笑って光に近づいて抱きしめた。

「もうほんとかわいいなぁ光ちゃんは！」

「ちょっとなによ！」

「大丈夫大丈夫！勇太君取ったりなんてしないから！」

「な…何言ってるのよ！あんた！」

「はは…」

「じゃあね～！一緒に行けないけど絶対また会おうね!!!」

「良子さんも元気で!!」

「さっさと現実に帰れ！もう！」

見えなくなるまで大きく良子は手を振って見送った。そのはつらつさが何とも良子の人となりが見えて勇太は自然と笑顔が漏れた。

「賑やかでなんかお姉ちゃんみたいなひとだったね。」

「ふん！騒がしいったらありやなかったわよ！」

「でも光たのしそうだった！」

「ふん。たまにはああいうのも良いかと思って付き合ってたのよ！」

「素直じゃないなぁ光」

「何よヴォーボモン！」

良子と別れ勇太達の旅は続く。